

高岡大仏



雪の日の高岡大仏（2003年2月撮影）

町並みの中の大仏

高岡大仏は、大手町（高岡古城公園の近く）の浄土宗のお寺・鳳徳山大仏寺にある、高さ約16メートルの阿弥陀如来坐像です。この青銅の大仏は、昭和8年（1933）5月に開眼式が開かれたもので、高岡の人々から「だいぶつつあん」と呼ばれて親しまれてきました。「日本三大仏」と自慢されることもあります。

奈良の大仏はお堂の中にあり、鎌倉の大仏は森を背にしていますが、高岡大仏は町並みの中に突然大きな姿を見せ、強い印象を与えます。松木宗左衛門や荻布宗四郎を始めとする篤志家の運動や寄付によって実現したと言われ、高岡銅器の中でも最大のものの一つです。朝な夕な拝礼する人が絶えませんが、高岡の技の象徴でもあるのです。

高岡大仏の歴史

高岡大仏は三「大」仏であるだけでなく、三「代」大仏でもあります。初代と二代の大仏は木像で、いずれも火事で失われてしまいました。初代は延享2年（1745）、坂下町極楽寺の良歎という人が建てたとされています。高さ約9.7メートルの木像でしたが、文政4年（1821）に焼けてしまいました。二代目は

天保12年（1841）に再建されたのですが、これも明治33年（1900）6月の大火で失われました。この大火の少し前に出た「高岡繁盛双六」（北陸中央新聞附録、明治33年1月、当館蔵）には、二代目の大仏の姿が土蔵のようなお堂とともに描かれています。

言い伝えでは、高岡大仏の初めは、もっと昔のことになっています。鎌倉時代に源義勝という人が、二上山のふもとに高さ約4.8メートルの仏像を作り、前田利長がこれを高岡開町の年（1609年）に町中に移したというのです。

今の高岡大仏は、その基壇がお堂になっていて、中には木造の大きな仏頭が安置されています。これは二代目の大仏の焼け残りだと伝えられてきましたが、「高岡繁昌双六」に描かれたのとは違うものようです。高岡市の地方史家・富田保夫氏の調査『高岡大仏関連年表』（改訂増補版2001年、高岡市立中央図書館蔵）により、火事の翌年（明治34年4月）に寄進されたものであることが分かりました。大火の直後から、何らかの再建計画があったこととなります。



「高岡繁昌双六」部分（明治33年1月、当館蔵）

なぜ銅像なのか

しかし、組織的な動きは、明治40年（1907）からのことでした。この年5月、大仏再建のための「寄附金募集ノ義ニ付願」（大仏寺蔵）が富山県庁に提出されます。そこには、前の大仏と同じような、木像とお堂を再建する計画が記されていました。翌月には「高岡大仏再興事務所」の趣意書が作られ、募金の申込書も配布されました。申込書では急に話が 바뀌っていて、「銅

像四丈五尺」(約 13.6メートル)を作ると呼び掛けています。趣意書に名を連ねた発起人は、堀二作、鳥山敬二郎、武田儀八郎、室崎間平、木津太郎平、塩崎利平、菅野伝右衛門ら 52 名、市内の名士が網羅されていました。銅像は木像よりもお金がかかりますが、そのお金は高岡の銅器業界に回るわけです。発起人たちの立場からして、新しい大仏には火事に強いだけでなく、地場産業のテコ入れになる期待もあったと考えられます。

しかし、そのままでは県への届け出が偽りになってしまいます。ようやく大正 5 年(1916) 2 月になって、県に「大仏像改造模様替許可願」(大仏寺蔵)が出されました。「先の知事川上氏及び故青木(正しくは青山)工芸校長」の勧めもあって、計画を銅像に変更したいと書かれています。転出した元県知事と富山県立工芸学校(今の県立高岡工芸高校)の亡くなった前校長という、もういない二人の意見を理由にした所は不自然で、かたちだけの届け出だったように思われます。実際、銅造での大仏制作は、すでに明治 44 年(1911)から始められていました。市長や高岡商業会議所(今の高岡商工会議所)会頭などの要職も務めた再建計画の発起人たちは、「民」でも「官」でもあるような存在でした。大仏は純然たる民間事業と言うより、旦那衆が大きな力を持つ古い町ならではの、「民」が「官」と氣息を通じ合わせた所に生まれた事業だったと言えるかもしれません。

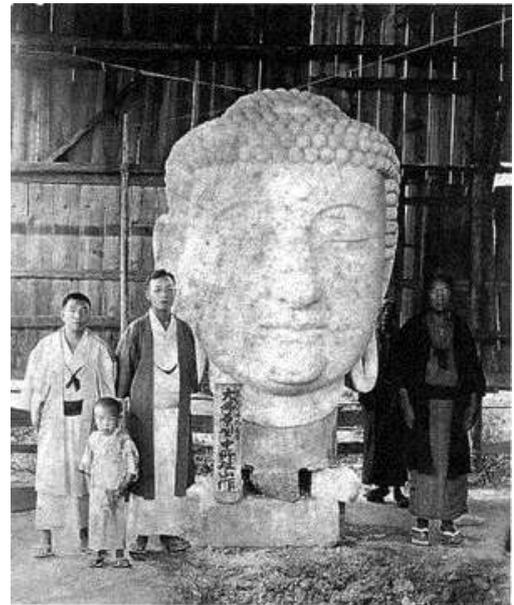


大仏再建寄付金応募者人名簿(明治 40 年 6 月、大仏寺蔵)

どのように作られたのか

高岡大仏の原形を手掛けた中野双山(1881~1940)は、富山県立工芸学校、東京美術学校(今の東京芸術大学)で塑像を学んだ人です。東京での同級生には朝倉文夫や藤川勇造など、後の大家もいました。明治 38 年(1905)頃に中退・帰郷し、大仏再建計画に携わります。大仕事に若い人材が抜擢されたように

も思われますが、彼の塑像や鑄造に関する新知識が求められたのかもしれませんが。中退の理由は大仏のためだったとも考えられますし、そもそも東京への進学自体、そのための国内留学だった可能性もあるでしょう。



大仏頭部原型と中野双山(少年の右、明治 44 年)

明治 44 年(1911) 9 月には大仏頭部の鑄造が完了しますが、資金難などにより、作業はなかなか進みませんでした。明治 33 年(1900)の大火のあと、開眼式が開かれる昭和 8 年(1933)まで 33 年間、高岡大仏再興事務所の趣意書が出る明治 40 年(1907)から数えても、四半世紀かかったことになります。

奈良や鎌倉の大仏は、輪切りにした体を重ねるように、下から順に鑄造したと考えられています。高岡大仏を間近に観察すると、膝のあたりまでは奈良や鎌倉と同じ工法を取ったのか、一体で鑄造されているようです。胸や腹のあたりでは、あちこちに丸いリベットの跡が見られます。これらの部分は四角いパネル状のパーツに分けて作られ、骨組にリベット止めする方法が取られたという説があります(定塚武敏他『高岡銅器史』桂書房、1988 年、578~579 頁)。パネルの縁にジグソーパズルのピースのような凹凸を作り、互いにはめ合せている所もあります。部位によって異なる方法が取り入れられているようです。

今の大仏は直径約 4.5メートルの円光背を背負っていますが、これは昭和 33 年(1958)に取り付けられたもので、開眼式時にはありませんでした。昭和 56 年(1981)には大仏を 11メートル後方に移動させて修理し、その前を公園として整備する工事が完成しました。平成 19 年(2007)にも大がかりな修復が行われ、現在に至っています。